

# もらった命と「ツナカン」

## 鮪立

ボランティアに自宅を開放し、  
お世話する唐桑人。  
人情あふれるつき合いが  
復興に向けた夢へつながった。

「ツナカン」。  
自家を開放することに抵抗  
はなかつたのか。その先に見るも  
のは何か。現在、旧自宅のすぐ  
隣に居を構えている盛屋一家。  
「唐桑のマドンナ」と菅野一代  
さんに聞いた。

ボランティアは水道代・  
電気代を支払うのみで、盛屋に  
収入はない。いつの間にか「ボラン  
ティアのボランティア」となつてい  
た一代さん。

ボランティアはツナカンに大量  
にやつてきて、鮪立や他地区のガ  
レキ現場で作業していく。盛屋  
水産のお手伝いに特化している  
訳ではない。しかし、夜は一代さ  
んがよくツナカンに顔を出し、  
和享さんが飲みに来る。差し入  
れも豊富。「お世話になつたみん  
など息の長いつき合いをしたい」

「（自宅をボランティアに貸す  
ことに対する）またここに人が住  
んでくれるんだ。電気がつくん  
だつてことが嬉しかった」「一代さ  
んはそう振り返る。一度は取り  
壊そくとも考えた。しかし、  
ボランティアが泊まるとき決まる  
と急ピッチで修理を始めた。床、  
天井、風呂、リビング。もちろん  
応急処置だが、立派に宿泊がで  
きる家になった。夫・和享さんは  
言う。「来る者拒まず。樂しいつ  
ちや、人が集まると。人が集ま  
んねえ家は、栄えねえんだ」「だつ  
たらみんなは福の神だね」と笑  
う一代さん。

学生ボランティアは迷惑をかけることもある。学生  
が帰った後のゴミも、一代さんが  
決まつた曜日に出す。きっと「恩」  
の売つた買つたではなく、彼女独  
自の「おもてなし」精神がそこに  
ある。

「なんの仕事した、かんの仕事  
したうていうよりも、傍にいてく  
れるつていうのは大きいんだよ。  
唐桑に入つてくれただけで被災

鮪立に盛屋水産がある。波を  
被つた自宅をボランティアと共に  
片付け、8月に短期ボランティ  
アの宿泊場所として開放した。  
それ以後、学生ボランティアの  
鮪立ガレキ撤去作業の拠点とな  
っている。鮪立の菅野宅で通称  
「ツナカン」。

「（自宅をボランティアに貸す  
ことに対する）またここに人が住  
んでくれるんだ。電気がつくん  
だつてことが嬉しかった」「一代さ  
んはそう振り返る。一度は取り  
壊そくとも考えた。しかし、  
ボランティアが泊まるとき決まる  
と急ピッチで修理を始めた。床、  
天井、風呂、リビング。もちろん  
応急処置だが、立派に宿泊がで  
きる家になった。夫・和享さんは  
言う。「来る者拒まず。樂しいつ  
ちや、人が集まると。人が集ま  
んねえ家は、栄えねえんだ」「だつ  
たらみんなは福の神だね」と笑  
う一代さん。

「なんでだろ？」当初はボランティアに自宅を片付けてもらつた  
「恩返し」だったのかもしれない  
が、そんな言葉ではもはや説明  
できない。事実、ボランティアが  
迷惑をかけることもある。学生  
が帰つた後のゴミも、一代さんが  
決まつた曜日に出す。きっと「恩」  
の売つた買つたではなく、彼女独  
自の「おもてなし」精神がそこに  
ある。